

ちびちび鉛筆

佐藤 恵美子

わたしは、コーヒーの空き瓶に、四百十六本の鉛筆を溜めている。どれも、長さは七ミリから一・五センチほどである。

子どものころから四十年近くのコレクションだ。きっかけは、ピアノの先生だった。ある日、先生のお宅でレッスンの順番を待っているとき、三センチ位の鉛筆が数本、ガラス瓶に入っているのが目に留まった。先生はにっこり笑って、「小さくてかわいいでしょ」とおっしゃった。そのとたん、猛烈な競争心が湧いてしまったのである。わたしなら、もっと小さくできる！

わたしはそのころ、小刀で鉛筆を削ることに凝っていた。しよりしよりと軸を削り、美しい円錐に仕上がった先端を眺め、うっとりしたものだ。

全体の長さが七センチほどになると持ちにくいので補助軸に入れ、さらに削っていく。二センチくらいになると、円錐の部分も短くなっていく。あまりに寸詰まりで実用には適さないで、あとはひたすら短くする。こうして、「使い切った」という満足感と共に、少しずつちびちび鉛筆は増えていった。

しかし、中学生になると、わたしは鉛筆を使わなくなつた。シャープペンの便利さに負けたのだ。鉛

筆がわたしの筆記用具として復活したのは、ほぼ三十年後のことである。

大きくなった子ども達がシャープペンに切り替えると、鉛筆削りで削れる限界の長さの七、八センチの鉛筆が、山をなした。わたしは、手で削ればまだまだ使える鉛筆を捨てることができなかつた。そこで、ちびちび鉛筆の生産を再開した。仕事用のペンケースに、補助軸に差した鉛筆と携帯用鉛筆削りを入れた。

わたしの主な仕事は、印刷所（正確には、組版専門の会社）の手伝いである。印刷物が、出版社の方が入れた赤字どおりに仕上がっているか点検する。

時に、「これは明らかに間違いだろ」と思う赤字がある。「どうしてここに赤を入れないのかなあ」というところもある。そこをぐつとこらえて、赤字どおりである。勝手に赤字を入れることは許されないと遠慮がちに「ここ、直したほうがよくないですか？」と鉛筆で書くだけ。

ある辞書を担当したときのこと。「かなづかい」を「かなずかい」とするよう間違いがあちこちにあった。赤字引き合わせをしただけに、言葉遣いが古く、誤字も脱字も多いことが見て取れた。初校に

「現代仮名遣いでは『○○』だと思ひますが」と鉛筆で書いたが、いつまで経ってもなんの訂正も入らない。思い余つて別ルートで言つてみた。出版社は間違いは認めたものの、時間がないので現状のまましていくという。

このときほど、下請けの悲哀を感じたことはない。間違いだらけの辞書が出版されるのを止められないのである。金輪際、この出版社の辞書は買わない、子ども達にも買ひ与えないぞと誓うだけが、ちっほけな抵抗である。

ここまでひどい会社はそうはないし、「よく見てくださつた」と感謝のメモをいただいたこともある。

しかし、報われるときは、たいてい密やかである。ある文学事典の記述に「盛岡市の現代詩歌文学館」とあつた。「盛岡？ いや、違うだろ。これは絶対、北上だ！ 中央にお住まいの執筆者には、盛岡でも北上でも、どっちでもいいんだらうなあ（両市は、優に五十キロは離れているのだが）」。

盛岡には詩歌文学館がないこと、北上にあることを確認してから、「北上ではありませんか？」と鉛筆書きした。次に戻つてきたとき、「**盛岡**」と赤字が入つていて、ささやかな満足を覚えるのみ。

このような指摘をする際の重要な道具が、鉛筆である。生涯で千本のちびちび鉛筆を目指して、ぼちぼち仕事していこうか。

北上